

平成21年5月1日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19820051
 研究課題名（和文） 個人差に対応した学習意欲を高める授業実践
 ナビゲーション・データベースの開発研究
 研究課題名（英文） Developing “Navigation Database” of motivational strategies:
 focusing on individual differences
 研究代表者
 田中 博晃（TANAKA, Hiroaki）
 広島国際大学・国際交流センター・講師
 研究者番号：80441575

研究成果の概要：

本研究では個人差に対応した学習意欲を高める授業実践を確立した上で、ナビゲーション・データベースの開発を行った。具体的には1) 英語学習意欲を高める授業実践法の確立、2) 学習者の個人差要因の把握、3) ナビゲーション・データベースの開発の3点である。その結果、外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動とGP活動を、学習意欲を高める授業実践法とし、英語学力と動機づけの質を指標とするデータベースを作成した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,010,000	0	1,010,000
2008年度	310,000	93,000	403,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,320,000	93,000	1,413,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：外国語教育

キーワード：学習意欲，動機づけ，データベース

1. 研究開始当初の背景

いかにして学習者の英語学習への動機づけ（意欲）を高めるかという問題は、長らく外国語教育研究における研究課題であった（例えば、Dörnyei, 2001; 三浦, 1983）。動機づけを高める研究は近年の国内外の動機づけ研究の学問的方向性（Dörnyei, 2001; 廣森, 2006）の1つであると同時に、「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」の重要な一端をも担う。

しかしながら、動機づけを高める授業実践

法の体系だった研究が極めて少ない。動機づけを高める方法は *Motivational Strategies* と呼ばれており、多くの研究は方略の提示に主眼を置いている。一方、その方略をどのように授業実践に取り入れるのか、また、実際に効果があるのか、という具体的な検証作業が行われておらず、英語学習の動機づけを高める授業実践の確立に至ってはいない。そこで本研究では、第1に英語学習の動機づけを高める授業実践を確立することを目的とする。

また英語学習の動機づけを高める授業実践法を確立する際には、ただ効果が見られたことを記述するのではなく、どのような学習者に効果的であったかを示す必要がある。それによって、その授業実践法の実践的活用を促すことにつながると考えられる。そこで本研究では個人差要因の把握を同時に行うことで、どのようなタイプの学習者に英語学習の動機づけを高める授業実践法が有効であったかを示すことを第2の目的とする。ここでは個人差要因として、学力と動機づけの質に着目をする。

そして、最後に研究結果を広く公開するには、オンライン上にデータベース化する方法が考えられる。そこで、本研究で確立された動機づけを高める授業実践法をデータベース化し、Webにて公開することで、より多くの教育実践者に研究成果を還元できるようにする。その際に、授業実践法の効果を学習者の個人差特性ごとに提示する。これがナビゲーションとなり、それを閲覧する教育実践者は、自分が問題にする学習者の特徴を容易に発見し、目的とする情報に達することが可能になる。

2. 研究の目的

そこで本研究では、英語学習の動機づけを高める授業実践を確立し、それを授業実践ナビゲーション・データベースとして公開することである。その際に、学習者の個人差に対応した形で授業実践法を提示する。具体的には(1) 英語学習への動機づけを高める授業実践法の確立、(2) 学習者の個人差要因の把握、(3) ナビゲーション・データベースの開発、の3点である。

3. 研究の方法

以上の目的を達するために、本研究では複数回の調査を行っている。それらすべてを個々に詳述することは紙面の都合上難しいため、ここでは主要な研究の概略を述べるにとどめる。

目的の1と2を達するために、実践研究を行った。英語学習の動機づけを高める授業実践を教育的介入として、その前後で学習者の動機づけの変動を捉えることで授業実践法の効果を検証した。その際に、学習者の学力と動機づけの質も測定することで、個人差ごとに英語学習の動機づけを高める授業実践の効果を検討した。調査の対象は日本人大学生である。データの収集は教養科目の英語授業の時間内で行った。動機づけの測定には Academic Motivation Scale (Vallerand, Pelletier, Blais, Briere, Senecal, & Vallieres, 1992) を日本人大学生用に改良した尺度を用いた。

また、これらの結果を踏まえ、目的の3を

達するためにデータベースの作成も行った。これについても、次節で詳細に述べる。

データベースに組み込まれている英語学習の動機づけを高める授業実践法として、外国映画・ドラマを用いたコミュニケーション活動とグループによるプレゼンテーション活動(GP活動)の2種類である。前者は学力指標と動機づけの質の両方をナビゲーションとして提示してある。後者は動機づけの質のみを指標としている。ここで述べる目的1と2に対する研究成果は、前者の外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動に関するもののみを提示する。目的3に対しては、GP活動も合わせて、結果の提示を行う。各研究の詳細は各論文にゆだね、ここでは概略の提示にとどめておく。

また2つの英語学習の動機づけを高める授業実践を教育的介入は、ともに自己決定理論(*Self-Determination theory*, Deci & Ryan, 2002, 以下SDTと略記)を理論的背景としている。SDTでは内発的動機づけを高める要因として3つの心理欲求を仮定している。「自律性の欲求」(*the need for autonomy*)とは、自身の行動がより自己決定的であり、自己責任性を持ちたいという欲求、「有能性の欲求」(*the need for competence*)とは、行動をやり遂げる自信や自己の能力を顕示する機会を持ちたいという欲求、「関係性の欲求」(*the need for relatedness*)とは、周りの人や社会と密接な関係を持ち、他者と友好的な連帯感を持ちたいという欲求、である。SDTでは、この3つの欲求が満たされることで、内発的動機づけが高まるとしている。

この自己決定理論を理論的背景として用いる利点として、Dörnyei (1998)は(1)実証的な手法によって、理論の妥当性を検証できる点を挙げている。特に、英語学習における動機づけ研究に適用した研究例が比較的多いため、日本人の英語学習のコンテクストでの理論的妥当性が担保されていると考えられる。また、(2)動機づけを高める要因を明確に提示している、(3)SDTの動機づけを高める要因は、英語授業の中に取り込みやすい、という点も挙げられる。

4. 研究成果

(1) 調査1での成果

調査1での調査協力者は日本人大学生52名の内、3回の測定でデータの欠損がなかった51名とした。調査協力者のTOEICの平均点は507点である。プレ、ポスト測定に加えて、中間測定の合計3回の測定を行った。プレ測定は授業のオリエンテーション時に、中間測定は中間テスト時に、ポスト測定は学期末の期末テスト時におこなった。

外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動を教育的介入とした結果、各群の調

査協力者の英語授業への動機づけ、リスニング活動への動機づけ、スピーキング活動への動機づけの3つを高めることができた。

リスニング活動への動機づけは、介入の前（第1時点）から後（第3時点）で、平均値の上昇が見られた ($M_{diff} = 0.48$, $F(2, 50) = 9.44$, $p = .00$)。より詳細に検討すると、第1時点から第2時点にかけて上昇した後 ($M_{diff} = 0.35$)、第2時点から第3時点にかけては微増した ($M_{diff} = 0.12$)。ボンフェローニの方法による多重比較では、第1時点目から第2時点目、第1時点目から第3時点目でのリスニング活動への動機づけの上昇が5%水準で有意であった。

スピーキング活動への動機づけは、介入の前後での上昇が見られた ($M_{diff} = 0.39$, $F(2, 50) = 8.82$, $p = .000$)。より詳細には、第1時点から第2時点にかけて上昇した後 ($M_{diff} = 0.59$)、第2時点から第3時点において減少した ($M_{diff} = -0.20$)。ボンフェローニの方法による多重比較の結果、第1時点目から第2時点目、第1時点目から第3時点目でのスピーキング活動への動機づけの上昇が5%水準で有意であった。

次に授業レベルでの内発的動機づけを検討する。英語授業への動機づけは介入の前後で上昇した ($M_{diff} = .50$, $F(2, 50) = 13.64$, $p = .00$)。より詳細には、第1時点から第2時点にかけて、平均値が著しく上昇しており ($M_{diff} = 0.46$)、その後の第2時点から第3時点まではほぼ無変化であった ($M_{diff} = 0.04$)。ボンフェローニの方法による多重比較の結果から、第1時点目から第2時点目、第1時点目から第3時点目での英語授業への動機づけの上昇が5%水準で有意であった。

(2) 調査2での成果

調査2での調査協力者は日本人大学生87名であり、TOEICの得点を基に2つのグループに分けられている。各グループの平均点は457点と642点である。ここでは便宜上、それぞれを450点レベル群 ($n = 51$)、650点レベル群 ($n = 44$) とラベリングしておく。

測定はプレ測定とポスト測定の2回である。プレ測定は授業のオリエンテーション時に、ポスト測定は学期末の期末テスト時におこなった。

外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動を教育的介入とした結果、各群の調査協力者の英語授業への動機づけ、リスニング活動への動機づけ、スピーキング活動への動機づけの3つを高めることができた。

リスニング活動への動機づけは、介入の前から後で、平均値の上昇が見られた。450点レベル群では ($M_{diff} = 0.29$)、650点レベル群では ($M_{diff} = 0.58$) であった。同様にスピーキング活動の動機づけにおいても、介入の前

から後で、平均値の上昇が見られた。450点レベル群では ($M_{diff} = 1.20$)、650点レベル群では ($M_{diff} = 1.13$) であった。英語授業への動機づけにおいても介入の前から後で、平均値の上昇が見られた。450点レベル群では ($M_{diff} = 0.59$)、650点レベル群では ($M_{diff} = .95$) であった。

(3) 調査3での成果

調査3では、動機づけの低い学習者を対象に事例研究を行った。

調査協力者は日本人大学生9名で、特性としての動機づけは $M = 3.08$, $SD = 1.01$ 、英語授業への動機づけは $M = 2.50$, $SD = 0.89$ である。調査協力者は特性としての動機づけがやや低い程度であるが、それと比較すると英語授業への動機づけがより低い学習者である。一方、調査協力者が入学時に受験したTOEICの平均スコアは513.3点であり、学力は大学1年生にしては一定の水準に達している。以上のことから、調査協力者は比較的英語力はあるものの、大学での英語授業への動機づけを無くしてしまっている傾向が強い学習者と言えよう。

測定はプレとポストの合計2回の測定で、プレ測定は授業のオリエンテーション時に、ポスト測定は学期末の期末テスト時におこなった。

その結果、授業活動レベルの動機づけでは、リスニング活動への動機づけ ($M_{diff} = 1.07$)、スピーキング活動への動機づけ ($M_{diff} = 1.00$) の共に顕著な上昇がみられた。よりマクロな授業レベルの動機づけにおいても、比較的高い上昇が見られた ($M_{diff} = 0.50$)。以上の記述統計量の検討から、本調査で行った教育的介入の効果によって調査協力者の英語授業への動機づけ、リスニング活動への動機づけ、スピーキング活動への動機づけの3つが高まったことが示された。

(4) 3つの調査のまとめ

以上の3つの調査から、外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動は、TOEIC450点レベル、500点レベル、650点レベルの各学習者の英語授業への動機づけ、リスニング活動への動機づけ、スピーキング活動の動機づけの3つの動機づけをすべて高める働きがあることが確認された。ただし、450点レベルになると、リスニングの難易度が高すぎると感じる学習者もいるため、リスニング活動への動機づけへの効果は限定的であった。

また、事例研究の結果ではあるが、授業への動機づけをなくしてしまった学習者にも効果的であることが示された。上記の結果と同様に、英語授業への動機づけ、リスニング活動への動機づけ、スピーキング活動の動機

づけの3つの動機づけを高めることが可能である。

以上の3つの研究では、SDTが提示する3欲求が動機づけの上昇にどのように関わったかも、相関分析や共分散構造分析によって検討しているが、ここでは紙面の都合上割愛する。詳細は各論文を参照されたい。

(5) 効果のあった授業実践法

以上の研究から、外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動が動機づけを高める効果があったことが示された。よって、ここでは具体的にどのような指導を行ったかを詳述する。また、それらの要因が動機づけを高める要因であるSDTの3欲求にどのように関わっているのかを述べる。

授業では教材プリントを毎週1枚ずつ配布し、それを教科書の代わりとして使用した。言語材料を機能別に配置し、授業では自己紹介・友人を紹介する表現、人の性格を描写する表現、人の見た目を描写する表現、誘う・待ち合わせる表現、買い物をする表現、レストランを選ぶ表現、レストランで注文する表現、などを扱った。授業の始めに重要表現を学習した後、それを使ったスピーキング活動やリスニング活動を行った。

授業の流れは、言語材料の提示、スピーキング活動、リスニング活動という順番である。スピーキング活動では、外国ドラマ・映画のシーンを基に作成したモデル・ダイアログを提示し、それに沿ってペアで会話練習を行った。ここでは新出の言語材料の定着を目的としている。次に、学習者が言語材料の使用に慣れてきたタイミングを見計らって、モデル・ダイアログから少し離れた発展的なスピーキング活動も取り入れることで、応用的なリスニング力の育成も目指した。リスニング活動は、学習した言語材料が用いられている外国ドラマ・映画のシーンを使った。言語材料が含まれているドラマ・映画のシーンでリスニングを行う前に、その場面のストーリーが理解できる程度にその前のシーンを日本語字幕つきで視聴させた。該当シーンでは、字幕を消した状態でリスニングを行った。大意把握問題を行った後、ディクテーション活動を行った。

この活動と3欲求の関連であるが、まず学習者の自律性の欲求の充足に関しては、授業の中で学習者のペースで学習できるように配慮した。特にリスニング活動時は、各学習者に割り当てられたパソコンを使った。ネットワーク上に音声ファイルを事前に用意し、授業時間内で学習者にそれをダウンロードさせた。その後、各パソコンに付いているヘッドセットを用いてリスニング学習を行わせた。これにより、学習者は聞き取りにくかった箇所を何度も繰り返して聞くことがで

き、自身のリスニング力に合わせたペースでの学習が可能になった。また音声ファイルは学習者個人のUSBメモリに保存させることで、自宅での自主的学習も可能にした。スピーキング活動ではペア活動を中心にタスク活動を行った。ただペアによってタスクをこなすスピードに差があることから、早く終わったペアには応用タスクも準備し、各ペアの学習速度にあわせて学習活動が進められるようにした。

有能性に関しては、外国ドラマ・映画のリスニングという難易度の高いチャレンジな課題を与え、それを達成することで達成感や有能感を感じられるように配慮した。外国ドラマ・映画は自然な速度で英語が話されるため、学習者が英語の速度に慣れるまは、かなり難易度の高い活動である。しかし、実際に会話で使われている語や表現は学習者が中学や高校で既習済みのものが多い。また学習者にとって新規学習事項を事前に授業で取り扱うことで、リスニングを行う場面に未習事項が含まれないようにした。スピーキング活動では、言語材料を単に提示するのではなく、会話の流れの中でどのように表現すると英語らしくなるかや、日常の何気ない言葉を英語にするとどうなるか、と問うなど、学習者の知的好奇心を喚起するように配慮して指導した。またペア活動を通して、繰り返し言語材料を練習することで、言語材料に慣れさせるだけでなく、それを使った応用的な活動も入れることで、より学習者に言語材料が定着しやすくなるように指導をした。

関係性の欲求に関しては、ペアでのスピーキング活動を主にすることで、学び合う雰囲気を作るようにした。座席は第1回の授業で学習者の友人同士で座らせ、その後はその席に固定した。座席の隣同士でペアを組ませ、仲の良い友人同士でのスピーキング活動によって、英語を話しやすい雰囲気になるように工夫した。ペア活動中は、教師は机間巡視指導を行い、適宜、学習者にアドバイスを行った。リスニング活動中は、学習者がパソコンを使つての個人学習のため、クラスメイトとの関わりはなくなる。しかし教師が机間巡視指導を行って、学習者の誤りやつまづきに対してアドバイスを与えることで、教師に質問しやすい雰囲気を作り、関係性の欲求に配慮した。

(6) データベース化

以上の研究は外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動の結果から得られたものである。データベースでは、この研究成果に加えて、GP活動による動機づけを高める研究の成果も加えて提示した。

データベースのコンテンツには、以下のものが含まれる。まず、英語学習の動機づけを

高める授業実践法が 2 つ。これは外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動と GP 活動である。データベース内には、それを具体的にどのように実践すればよいのか、という授業展開の具体例が示されている。外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動は大学生を対象に行われた調査であるので、大学の授業での具体例が示されている。GP 活動は高校と大学の両方で調査を行っているので、両方の実践例を提示している。

またナビゲーション機能として、個人差指標を提示している。1 つ目は学力指標で、TOEIC の点数である。調査が行われた 3 つのレベルで提示されている (450 点レベル, 500 点レベル, 650 点レベル)。2 つ目は動機づけの高低であり、3 つ目は動機づけの質である。動機づけの質に関しては、SDT を理論的背景にしており、外発的動機づけ (無動機, 外的調整, 同一視調整, 取り入れ調整) や内発的動機づけなどである。ナビゲーションはブルダウンバー形式になっており、これらの指標を基に、その学習者に最も効果がある英語学習の動機づけを高める授業実践法が提示される形式になっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 田中博晃, 3 つのレベルの内発的動機づけを高める: 動機づけを高める方略の効果検証, JALT Journal, 31, 印刷中, 査読有.
- ② 田中博晃, クラス内の動機づけが低い学習者の動機づけを高める実践研究, JACET 中国四国地区紀要, 印刷中, 査読有.
- ③ Tanaka, Hiroaki, What facilitates students' active engagement in learning English in the classroom? Causal analysis between psychological needs, English classroom motivation and engagement, JLTA Journal, 印刷中, 査読有.
- ④ 田中博晃, 3 つのレベルの動機づけを高める方略の効果検証, 第 34 回全国英語教育学会発表要綱集, 2008, 44-45, 査読無.
- ⑤ 田中博晃, 学習者の英語授業への取組みを促す要因の検証, 第 33 回全国英語教育学会発表要綱集, 2, 2007, 165-168, 査読無.

[学会発表] (計 4 件)

- ① 田中博晃, 3 つのレベルの動機づけを高める方略の効果検証, 第 34 回全国英語教育学会, 2008 年 8 月 9 日, 昭和女子大学.
- ② 田中博晃, 動機づけを高める方略の効果検証, JACET 中国四国支部大会, 2008 年 7

月 6 日, 広島国際大学.

- ③ 田中博晃, 授業への動機づけが低い学習者の動機づけを高める実践研究, 中国地区英語教育学会, 2008 年 6 月 21 日, 島根大学.
- ④ 田中博晃, 学習者の英語授業への取組みを促す要因の検証, 第 33 回全国英語教育学会, 2007 年 8 月 5 日, 大分大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 博晃 (TANAKA, Hiroaki)
広島国際大学・国際交流センター・講師
研究者番号: 80441575

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者